

平成30年度学芸員等在外派遣研修実施報告書

国立科学博物館
門馬綱一

平成30年度学芸員等在外派遣研修の実施結果について、下記のとおり報告します。

1 研修テーマ 視覚に訴える鉱物展示プログラムとコレクションの構築方法の調査

2 研修期間 平成31年 1月 3日～平成31年 2月28日

3 研修概要

(1) 研修先の名称

スミソニアン国立自然史博物館
ロサンゼルス自然史博物館

(2) 研修の内容

4. 先進的なコレクションマネジメント，資料管理の在り方
12. その他，我が国の博物館政策の参考となる海外の博物館政策や動向，実践活動・研究事例について

(3) 研修の成果

最初の研修先として予定していたスミソニアン国立自然史博物館は、2018年末から2019年1月25日まで続いた米政府閉鎖の影響により閉鎖され、職員は建物内への立入はおろか、メールや電話等への対応業務も禁じられた。閉鎖直前に受け入れ担当の学芸員からそのような状況の連絡を受け取っていたため、現地到着後、ニュースに注視しながら待機したが、結局スミソニアン国立自然史博物館において予定していた調査は実施できなかった。しかし、ツーソン Gem & Mineral Show 直前のぎりぎりのタイミングで政府閉鎖が解消したため、ツーソンにおいてスミソニアン国立自然史博物館の学芸員と面会し、同博物館の館外におけるアウトリーチ活動について調査することができた（後述）。

ロサンゼルス自然史博物館においては、来館者の興味を惹きつける展示プログラムと、先進的なコレクションマネジメントの工夫について、それぞれ研修を行った。ロサンゼルス自然史博物館の鉱物展示室は、広い鉱物展示エリアと、その奥の小さな宝石展示室に分かれており、鉱物展示エリアは (1) 地元カリフォルニアの鉱物、(2) 化学分類に基づく展示、(3) その他島展示に大別できる。カリフォルニアの鉱物としては、トルマリンやリチア輝石（宝石名クンツァイト）など、美しい宝石鉱物が多数目についた。また金に関して

はゴールドラッシュと絡めて独立の広い展示コーナーが設けられており、地域の特徴を出した展示が展開されていた。鉱物の化学分類法は一般には難解に思われがちであるが、各鉱物ラベルには、その鉱物を構成する元素が元素記号を使わずに言葉（英単語）で書かれ、また展示室の長辺一面を用いて展開される化学分類展示のすぐ背面には色や形の華やかな鉱物の島展示が展開されるなど、飽きさせずに、誰もが自然と鉱物について知ることができる工夫が随所に見られた（図 1）。宝石コーナーにおいては常設展示を一時的に撤去して宝石の特別展を行っていた。



図 1. ロサンゼルス自然史博物館の鉱物展示ホール。右側の壁面ケースが化学分類順、左側の島展示が鉱物の外見を意識した展示となっている。

研究室および鉱物標本収蔵室は常設展示室に隣接しており、スペースを有効利用するために標本サイズによって異なる収蔵方法が用いられていた。具体的には、サムネイルサイズ(約 2cm 以下)とスモールサイズ(3~4cm 以下)の標本を従来の収蔵ケースから抜き出し、それぞれ、新たに専用の棚を用意してそちらに収蔵していた。収蔵標本の画像化作業が進められており、現在 1~2 割が完了している。画像登録作業の簡素化とミスをなくすため、ラベルの上部に標本番号をバーコード化して印刷し、そのラベルを標本と同時に撮影、画像データの登録作業時にその画像中のバーコードを読み取るシステムを用いていた。バーコードの読み取りは市販の安価な装置を使用でき、PC 画面に表示した写真中のバーコードを読み取ることで、ファイル名の自動変換ができるため、作業の簡素化だけでなく登録ミスを無くす上でも非常に有用な方法であった。撮影やデータベース登録作業は、隣の南カリフォルニア大学の学生数人がアルバイトで当たっていた。

ツーソン Gem & Mineral Show は 60 年以上の歴史を持つ世界最大級の宝石・鉱物・化石の展示即売会であり、今回、ロサンゼルス自然史博物館の学芸員に随行して研修の一環として訪れた。当初一会場のみから始まったショーは、現在では市街各地の 40 以上の会場において、延べ 1 ヶ月近く続く規模に発展し、世界各地のディーラーに加え、博物館学芸員も一同に集結する場

となっている。そのため、学芸員の会合もこの時期に合わせて行われ、今年
は「博物館コレクションの役割と、それを一般に周知する方法、増え続ける
コレクションをいかに維持するか」といったテーマについて、「現在では収
集不可能な 100 年以上前の標本から見出された新鉱物」などの具体的な事例
を紹介しながら討論が行われた。ツーソンショーのもう一つの大きな特色は、
商業ベースの展示即売会でありながら、世界中の博物館が、それぞれの館の
標本を用いた展示ケースも出展している点である。また、鉱物蒐集家個人や
非営利団体なども同様の展示ケースを多数出展しており、博物館と市民が協
力して、膨大な量（100 ケース以上）の展示コンテンツを作り上げ、鉱物につ
いての普及教育活動を行う場としても機能している。博物館の展示は例年、
コンベンションセンターにて行われる(通称)メインショー（図 2）の一部とし
て展開されるが、それらに加えてロサンゼルス自然史博物館では今年初めて
の取り組みとして、メインショーに先立って開催された高級リゾート地
Westward look の会場において、学芸員 3 人の解説付きでの展示を行っていた。
展示標本の約半数、十数点は常設展示の中でも見栄えの良い標本を一時的に
抜き取って用意され、そのことから館外における普及教育イベントへの力
の入れようが感じられた。



図 2. ツーソンコンベンションセンターで開催されたツーソン Gem & Mineral Show（通称メインショー）。業者の展示ケースと、博物館や個人の展示ケースが無数に並ぶ。

メインショーにおける展示は、毎年テーマが決められ、テーマに沿った展示ケースもあれば、無関係の展示もあり、両方のケースを出展している博物館もいくつか見受けられた。今年のテーマは“Wulfenite loves...”（愛すべきモリブデン鉛鉱）であった。一般にはあまり馴染みのない鉱物と思われるが、オレンジ色の美しい鉱物で、地元アリゾナ州の「州の鉱物」にも指定されている。Wulfenite は 18 世紀にオーストリアで発見され、幾度かの名称変更を経て、オーストリアの博物学者 Franz Xaver von Wulfen(1728-1805)にちなんで命名された。命名の経緯と Wulfen 博士について、18 世紀の標本と絵画を使用して紹介したオーストリア ウィーン自然史博物館の展示は特に印象的であった（図 3）。



図 3. ツーソンショーにおけるウィーン自然史博物館の展示。左奥から Wulfenite の名前のもととなった Wulfen 博士の肖像画、Wulfen 博士の著書に描かれた鉱物の絵とその実物標本（手前）、植物学者でもあった Wulfen 博士が記 Wulfen 載した新種の植物。

スミソニアン自然史博物館は、水晶やトパーズなど宝石鉱物の巨大なカット石を並べた展示ケースと、寄贈標本の意義を紹介する展示ケースを出展していた（図 4）。今回の研修を通して様々な方から指摘されたのは、研究とコレクションの充実をはかる上での、寄付や寄贈の重要性と、そのために鉱物そのものに興味を持ってもらう普及教育活動の大切さである。また、興味をもってもらうための入り口として、宝石類や見た目に美しい鉱物標本なども

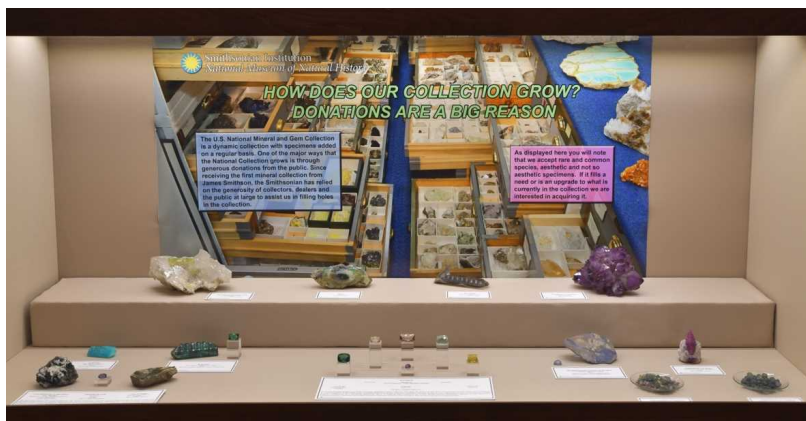


図 4. スミソニアン自然史博物館の展示ケース。特別な標本でなくとも、様々な品質・種類の標本それぞれに、寄贈を受け入れる意義があることが、実際に寄贈された標本と共に紹介されていた。

重要であり、標本購入資金獲得のために、クラウドファンディングや、研究者による展示ホール内でのディナートークショーなど、先進的な取り組みも行われていることを教えられた。

(4) 研修成果の活用計画

鉱物に関する普及教育活動としては、国立科学博物館の常設展示内で休日に行っている研究者によるトークの中で、研修内容を生かした話題を3/21に紹介した。今後も同様の機会に生かしていく予定である。また、研修先の博物館から鉱物標本を借用するなどして、鉱物に関連した企画展を開催することを計画している。